

夕子が家に来て、徳平夫婦の生活に少しずつ変化が訪れた。

朝、かみさんは張り切って三人分のごはんの支度を
して、一緒に食べてからパートに出かける。以前は
朝食だけで昼食は作らず、徳平は今まで朝ごはん
の残り物を一人でわびしく食べていた。ところが夕子
が来てからというもの、かみさんは昼休みとパートを
一時間減らした時間を使い、家に帰って来て手早く昼
ごはんを作り、今では三人で温かい昼食を一緒に食
べるようになった。

「ふん、ゲンキンなもんや」と夫としての地位が孫に
劣るのかと憤慨しても、やはり朝の残り物に比べて、
ほかほかの昼食を三人で食べる方がずっとおいしい
ことは認めざるを得なかった。

「清が用意してきた服はどれも男の子みたいやね。
『僕は何歳かな』なんて訊かれるで。夕子ちゃんだっ
て、それは嫌やろ」

夕子は少し頷く。
「そうやろうと思とった。今度ばあばあと一緒に可愛
い服買いに行こうの。この商店街には『ニコニコ堂』
という激安の古着屋さんがあるんやで。古着ったって、
近頃じゃ新品同様やからの。全然汚くはないし、却っ
ておしやれなんで。それくらいはこのばあばあでも知
つとるよ。ビンテージモノ、ブランドモノなんでの。
古着の『ニコニコ堂』には可愛い子供服がたくさんあ
って、あたしはもし孫がおったら、あれもこれも着せ
たいと思とったんや。『ニコニコ堂』はの、もともと
はブリキ屋さんやったんやけど、えらい商売替えや。

昼間は徳平が店で夕子のお守りをする。そのうちに
パートを終えたかみさんがいそいそと帰ってくる。

かみさんは以前のような嫌味を徳平に向かっていっ
さい言わなくなり、妙にはしゃいだような口調で
「夕子ちゃん、夕子ちゃん。今日の夕ごはんは何にし
ようかね。夕子ちゃんはオムライスが好きかい」と話し
かけている。

夕子は清の言った通り、少しも言葉を発しなかった。1
しかし相手の言っていることはわかるらしく、頷いた
り、首を左右に振るといふ身振りはする。徳平は最近の
三歳児はかなりの言葉を話すのに、どうしてこの子は
少しもしゃべらないのかと心配だったが、かみさんは
気にかけて風もなく、夕子に話しかけ、一人で答えて
いる。

夕子ちゃんはブリキ屋さんなんてお店、知つとるかい
な」

夕子は知らない、というように首を小さく左右に振
る。夕子はなかなか気を許す素振りは見せず、何か言わ
れるたびにすがりつくような眼をして、徳平夫婦の顔
色をうかがうのだ。

夕子は今までどんな生活をしてきたのだろう。あの
無責任な清のことだから、あちらこちらに預けて、ろ2
くすつぽ世話などしなかったに違いない。それで、夕子
はすっかり用心深くなり、殻に閉じこもってしまい、
ものを言わなくなったのではないか。徳平はすぐ近く
にある幼稚園に入園させて、同じ年頃の子どもたちと
交わったら言葉も出てくるのではないかと考えた。

夕子の寝小便是一週間くらい続いたが、オネショマットを敷いて、それを洗うくらいなので気にもならずに叱らなかつた。するといつの間にか寝小便是はしなくなつてしまつた。

隼人と航平が徳平の店にやつて来た。二人は知らない小さな女の子がいるので目を丸くして店を覗いていた。

「おお、隼坊に航ちゃん。ちよつとおいで。遠慮せんで中に入つてきまご」

徳平が手招きすると二人は恐る恐る店の中に入つてもじもじしている。

「この子を紹介するわな。ええと、『ゆ・う・こ』という名前はまだ三歳なんや。夕子ちゃん、この子らはな、この春、ピカピカの小学一年生になつた山本

ちの秘密基地を特別に見せてやつてもいいよ。夏休みになつたら梅島神社に連れていつてあげる。神社にはセミが一杯いるし、その時にはセミ捕りをしてうんと遊べるよ」

航平が負けずに年上つぽいところをみせた。

「僕の家は、ばあちゃんがいる。夕子ちゃんのもばあちゃんがいる。よく似ているから仲良くなれるよ」

徳平が夕子と一緒に店番をしているうちに夕子がクレヨンで絵を描くことが大のお気に入りであることを発見した。それで店の商品である野菜をかたっぱしから描かせた。そうして夕子と一緒にのんびりと店番をしていると、かつて感じていた店仕舞いについての悩

り容店の隼人君と、荒物屋の航平君。年は二人とも七歳やから、夕子ちゃんよりもうんと上のおにいちゃんになるの。隼坊と航ちゃん、時間がある時にはこの子と一緒に遊んでやつての」

夕子は例の上目遣いで二人を見た。そして用心深く、じりじりと店の奥の方に後退して、徳平が大根漬けをしようとする意図がうかがへた。徳平が隠れてしまつた。隼人と航平も突然現れた謎の女の子に少し戸惑っている様子だ。

「まあ、気長によろしゆうにな。仲良くしたつてな」徳平がそう二人に頼むと、隼人が親切なおにいちゃんらしく胸を張つて言つた。

「うん、僕たち女の子だつてかまわない。夕子ちゃんが恥ずかしがらなくなつたら、商店街の端にある僕た

みが跡形もなく消えていることに気付いた。もはや店ではひとりぼっちではなかつたからだ。そこに隼人と航平が真新しい自転車に乗つて八百徳にやつて来た。

「徳じいちゃん、キャベツを一個おくれ」

隼人の声は弾んでいた。

「僕もキャベツを買う」と航平が続いた。

徳平はこの子たちの言つたことに驚き、二人の乗つて来た新品の子ども用の自転車にたちまち目を見張つた。

隼人の自転車は目のさめるような青で、航平のは銀色に光っている。それは八百徳の斜め前の自転車屋で長い間、陳列されていて二人がいつも欲しそうに眺めていたものだった。

「おつ、隼坊に航ちゃん、えらいええ自転車に乗ってるやないか。とうとう買うてくれたんやな。それにキャベツがいるとはさつそくお使いか」

徳平は顔をほころばせた。あんなに欲しがっていた自転車を二人が手に入れたことと、キャベツを買いに来てくれたことがうれしくてたまらなかった。

「お使いじゃないよ。僕の貯めた小遣いで買うんだ」

「僕も自分の小遣いで買うんだ。キャベツをお礼にお好み焼き屋の『吉野』に持って行くんだ」

吉野は東の方角にある万代橋付近のお好み焼き屋で、戦災で焼けなかった数少ない店だ。老舗といってもよく、商店街を通行する中学生や高校生が部活など終えた帰りに立ち寄りたりするので、ひなびているこの商店街では客足が多い店の部類に入る。

吉野という屋号を聞いた途端に、徳平は自分の子ども時代を思い出した。今は四十代後半のおかみさんがやっているが、その先代の時代に徳平は吉野でのお好み焼きを食べるのが楽しみでしかたがなかったものだ。

『吉野』にもずいぶんどこ無沙汰しているなあ) 徳平は遠い昔を懐かしむ顔つきになり、かつて吉野の壁に張られていた手書きの品書きや煙でくすんだ天井をすぐに思い出した。

あの頃は子どもたちがスズメみたいに押し合い圧し合いして目の前の鉄板を唾を飲み込んで見ていた。

吉野のおばさんが小麦粉をといいた汁をお玉ですくい、お玉のおしりで魔法のように薄く伸ばす。そこに粉状になった鰹節と油粕をふりかける。そしてその上からまた小麦粉の汁をたらす。焼けるとくるりとヘラで

ひっくり返し、また焼いて、できあがったところでたつぷりのソースをつけて食べる。ほかほかのお好み焼きのうまかったこと。ところで……昔のお好み焼きはキャベツが入っていたらどうか。『うん、キャベツ?』

徳平は夢想から醒めた。

「隼坊と航ちゃんはキャベツを買いに来たんか。それで、またなんでキャベツを二人して吉野に持って行くんな?」

隼人と航平の話聞いて徳平は二度びっくりした。

航平のばあちゃんが吉野に行つて愚痴をこぼした。孫に約束していた自転車を買ってやりたいのだが、荒物屋は少しも流行らないし、年金では生活はかつかつだし、自転車まで手が廻らない。理容店の隼人のところも今から商工金庫に借金して改装をしようとし

ているところで、隼人のかあちゃんは約束が守れないとつらがつている。子どもたちが我慢して、無理を言わないのがことさら不憫だ……。

(以上3月12日放送分)